

B-170 福島県多方地区における衣生活の史的研究（第6報）

壳立帳よりみた吳服商の家の商法と庶民の衣生活について

明治時代後期を対象として、

県立米沢女学園大・傳承隊

聖母学院大・石川妙子・研究員

那山さち子・助教・西田さち子・准教授

目的 前報につづき 吳服商販売側からみた庶民の衣生活を 吳服商の家の壳立帳を資料として考察すると共に 5家の商業からみた当時の機物染色、状況などあわせてみる。

5家は年何回と市日を作り 大掛かりの呂糸商品や 新新奇形商品と宣伝販売し、また庶民の購買の便宜を計り、切り売りや既製品化を行なう傾向的商業を経て すたが、本報では明治43～44年夏冬の壳立帳からみた5家の商法と庶民の衣生活について述べる。

方法 5家の明治43、44年度壳立帳、記念壳立帳の分析結果から考察。

結果、1) 明治43.2.11(旧正月)の初売は 販売件数172 内81%が戻地 67%が小切札5%が綿反物 衣類は角巻 羽織 褐袴48%で売上高の半分が小切札である、2) 同43.1.1～31の1ヶ月間に同傾向で 販売件数980%が戻地で 66%が小切札 3%が綿反物 10%が衣類である。3) 同43.7月3～5日で販売件数287%が戻地 73%が小切札 ×%が綿反物で 1)2)同様小切札を主とした不景氣の中、商売内容が察知された、但し衣類×%の中には古袴古着と並んで“洋服”が増え 新旧混交の衣生活の実態がみられた。4) 同44.7月3～5日の記念壳立帳では小切札 販売件数は36%に半減し 綿 編反物が20%と急落し 前年に比し量、質に変化がみられた、即ち小切札から綿 編反物へ需要の変化、大衆の花形ガスホルム 錦絞仙 上布の進出、花柳等好みの明石の一派への普及、国産生地のメリヤク反繭、ネルなどの売上げ品目の増加など 明治末期の機物の発展と推移や商店の売出しにかけた傾向的な商業がみられた。